

自然農法の水稲新品種

「はたはったん」の紹介

研究部

このコーナーでは、当センター農業試験場で取り組んだ研究の成果をご紹介します。

研究部水稲チームでは、生産者の方々がつくりやすく、消費者が喜ぶ美味しいお米となる自然農法向き水稲品種の開発を行って来ました。

そして「はたはったん」を育成し、2012年に品種登録しました。「はたはったん」は「コシヒカリ」と比べやや晩生で丈が高く（写真1）、同等以上の食味値が期待できます。栽培に適した場所は、従来コシヒカリの栽培が奨励されていて、コシヒカリが早く出穂して高温登熟してしまう地域です。穂数が少なく穂が充実しやすい「はたはったん」の収量や品質を高めるには、水田土壌の肥沃度に応じて雑草に優る植え付け本数とします。

新品種育成の経過

「はたはったん」は自生株から選抜された品種です。2000年に栽培した穂が直立したタイプの品種と穂が垂れるコシヒカリとが自然交雑して、翌年交雑種が自生したものと推定しています。その後、穂が垂れる系統で、コシヒカリより穂が大きく草丈の高い系統を無肥料栽培条件で選抜しました。2009年に出願し2012年に農水省登録品種となりました。

品種名の由来

この水稲品種を育成した田んぼが「旧長野県東筑摩郡波田町」（現在は

松本市波田）にあったことから、その地名の

「はた」を冠しました。

昔は「波多」の字を使い水争いなど諍い^{いさか}の絶

えない村でしたが、明治の合併時に、稔り多い田んぼが拡がるという希望

を託して、波田村に改称された経緯があります。そのため、「稔り多い

田んぼ」と「争いのない暮らし」の願いが込められた「はた」地域へ、

自然農法の試験場と共に新しい品種を守り育ててくれた感謝の心を込め

ました。また、育成開始時の自然農法水田が八反歩（80a）あり、この

種子を通して、地域農業が発展する末広がりの八の音の響きをとって、



写真1
「はたはったん」(右)
「コシヒカリ」(左)

「はたはったん」としました。

「はたはったん」の特徴

はたはったんはコシヒカリに比べ、少肥でも収量性が高く、出穂がやや遅い中の晩生種（長野県）です。稈が長く籾数の多い穂重型の品種で、玄米はやや小粒のタイプのになります。近年頻発するコシヒカリの高温登熟障害の発生が著しい地域でも、出穂がやや遅くなるため未熟粒

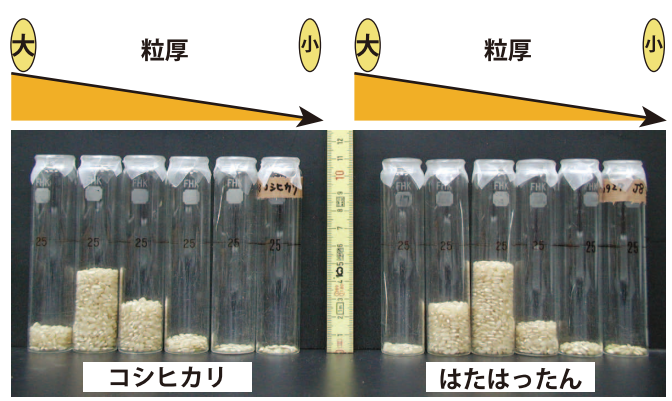


写真3 玄米の粒厚分布の比較

写真2 「はたはったん」玄米粒



表1 栽培試験における「はたはったん」と「コシヒカリ」の品質比較（2010～2012年）

	旨み値（0が基準、+値は良）			
	2010年	2011年	2012年	平均
はたはったん	1.18	1.35	1.44	1.32
コシヒカリ	1.09	1.30	1.21	1.20

※旨み値は近赤外線分光計（Nirs-6500）により測定し、滋賀県産「日本晴れ」が基準値となる

栽培のポイント

栽植密度と施肥量

穂数がやや少なく、1穂あたりの粒数が多い特徴を活かし、300本/m²以上の穂数を確保できる株数を植えます。コシヒカリより植え付け株数を増やし、植え付け本数を調整（標準3～4本/株）して安定した収量を確保します。

コシヒカリという品種は長野県の奨励品種の中では自然農法に適した特質を持っています。はたはったんはそのコシヒカリと同程度に、無肥料で生育できる能力を持っています。窒素量で7kg相当の有機肥料をすき込む区、窒素量3kg相当を田面施用する少肥区、窒素量7kgすき込みと田植え後窒素量3kg田面施用で合計10kg施用する区、窒素量10kgすき込みと窒素量5kg田面施用の多肥区をつくり比較しました。育苗時の播種量や田植え時のかき取り本数によって適正な栽植密度は大きく異

の発生が抑えられます。コシヒカリに比べ食味値が高く、同等の甘味があり粘りが少ないすっきりした味わいです。（写真2・3・表1）

なりますが、実験では痩せ地・少肥条件では坪当たり株数を80株まで増やしても収量が高く、多肥条件の疎植（60株）の場合のみコシヒカリに比べ収量が劣りました。ただし、米の品質も考慮して肥沃地では坪当たり50～60株を植え付けの目安とします（図1・2）。

適用地域と作業適期

寒冷地～中間地、暖地の早期栽培、東北平坦部と甲信地域の標高700m以下の地域や北陸地域で、「コシヒカリ」が早生～中生に分類され、「コシヒカリ」の栽培

が奨励される地域に適します。

①耕転時期を早めるために寒冷地では排水を確保して収穫直後（10月上旬）の耕転を可能にします。

②地温が20℃以上になるまで移植を遅らせることで、春の湛水期間を20日程取り2回にかきを行います。

③稲わら分解期間を充分に取り、非作付

け期間に土壌の水管理をすることで、稲わらを腐熟させ、田植え後の水稻の生育障害を防ぎ、雑草を低減します。

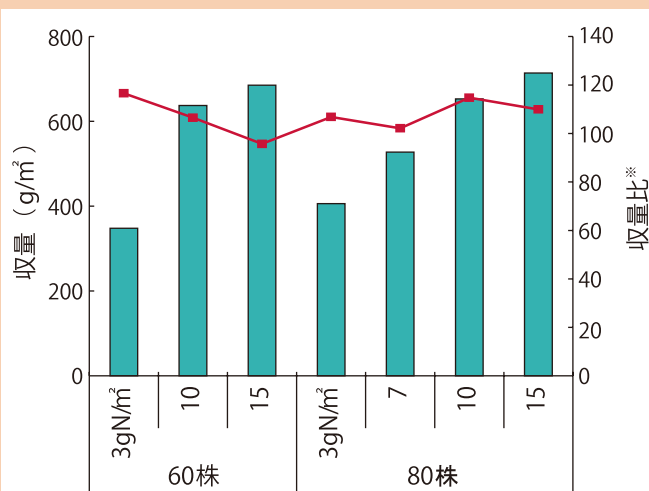


図2 異なる栽植密度と施肥窒素量における「はたはったん」の収量と収量比（2010年）
※収量比はコシヒカリを100とした。

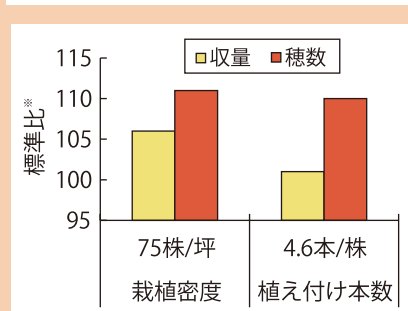


図1 栽植密度と植え付け本数を高めたことによる収量及び穂数の増加（2010～2012年）
※標準比は栽植密度55株/坪、植え付け本数3.6本/株を100とした。